よしはらソープの
ナンバーワン

よしはらソープのナンバーワン

「はい。早速ですが願いします」

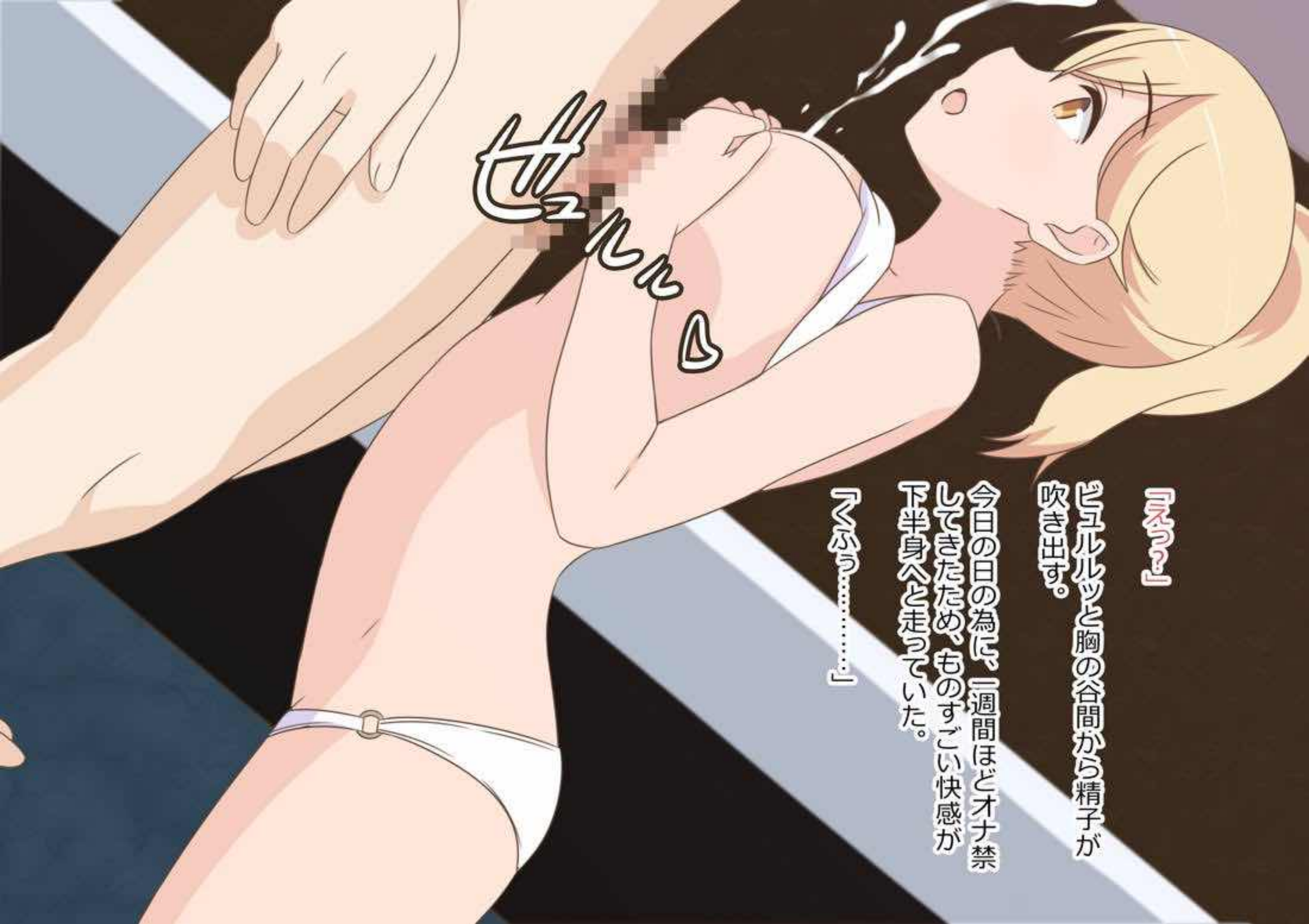
そして彼女は、そしてもハンバーロハを終わる談話をしたそうです。

「ありがとうございます。なんでしょうか」

ドアは、都内某所にある高級ホテル『ちっちゃい』。
「ちっちゃい」でも「あるちゃい」でも「ちっちゃい」はでもある。

ここでいう「いつもの」とは、彼女の大きな乳房を使ったパイズリのことである。
「はーい、それじゃあいきますね」
素早く俺の服を脱がせると、彼女は水着の上をたくしあげ、すっぽりと俺のモノを柔らかなその谷間で包み込んだ。
ズリ
ズリ

ぐぃっ
ぐぃっ
「いち、にぃ、いち、にぃ」
パフパフと柔らかな感触に包まれる。
「はぃ、いち、にぃ、いち、にぃ」
上下に動く乳房のあまりの気持ち
良さに、俺はすぐさま絶頂へと
導かれてしまった。
「あ、彩花さん、俺もう！」


ぢゅぷぷ
「えっ？」
ビュルルッと胸の谷間から精子が吹き出す。
今日の日の為に、一週間ほどオナ禁してきたため、ものすごい快感が下半身へと走っていた。
「くふぅ……」

「す、すみません、早くて……」
「いいえ、気にしなくていいですよ。それより、いっぱい出ましたね。おっぱい気持ちよかったですか？」
「最高でした！」
「ふふっ、よかった。それじゃあ、お風呂に行きましょうか」

部屋の中にある浴室に向かうと、彼女は
着ていた水着を脱いで、泡だてたボディー
ソープを自らの身体に塗りつける。
「先程褒めていただいたので、今度は
おっぱいを使って身体を洗っていきますね」
フニュニュ♡

「ほら、いきますよー♥」
やばい。
パイズリも気持ちよかったけど、
ボディーソープでヌルヌルになった
おっぱいもまた気持ち良すぎる。
ヌリュ
ヌリュ

「ゴシゴシ・ゴシゴシ♥」
「おおう」
フニフニと柔らかなスポンジの感触に、
コリコリとした乳首のアクセント。
ここが桃源郷か。
フル
ズム

「はーい、それじゃあ洗い流したら、今度は湯船の方に行きましょうね」
「はーい」
今なら何を命令されてもきいてしまいそうだ。
恐るべし、おっぱいの魔力。
フリュ
ガバ

ミリ
ミラ
「おおう、そこは……！」
湯船に入ると、彩花さんは中腰となった俺の尻の間に、顔を埋める。
そして、すぼんだその中心に舌を這わせた。
「んふ、んん、んちゅ♥」
ぴちゃ
ぴちゃ

ぬるるる
ミリ
ミリ
「んんー♥」
ニュルリと尻の穴に舌が差し込まれる。
「あっ、あっ、これヤバい、これはヤバいって！」
思わず叫ぶようにそう言っていた。

ゆるるる…♡
「うぐぅ！」
我慢できずに、ドピュルッと本日二度目の射精をむかえる。
「んふっ、ふぅ……。あらあら、また出ちゃいましたね」
そういった彼女の手は、シコシコと未だ動き続けていた。
ふぁ♡

一方その頃、彩花が祖母から受け継ぎ、管理している学生寮では――
「な、奈々さんやめましょうよー！」
「はーむ、んちゅ、ちゅう♥」
どこか彩花に似た面影の、日焼け少女がベッドの上に立った少年の小さな蕾のようなそれを口に含んでいた。

「だ、誰か帰ってきたら……
あっ、はぁ！」
「んちゅ、ちゅうう、ぢゅるる♥」
「あっ、あっ、ダメ！　これ以上は！」

ん…
ガシッ
「ふぁあああ……！」
ビクンと少年の身体が跳ねると同時に、少女の口の中へと熱いものが放出される。
『んん―！』
彼女はそれを、こぼさないようにゆっくりと飲み干していった。

「……んっ、ぷはぁ♥
亜樹の精子、飲んじゃった♥」
「うう……」
「イシシ、気持ちよかったっしょ？
まだまだお姉ちゃんがいないうちに、
色んなことする予定だから♪」

ガガ…
「三回も出したのに、もう復活したんですか？　凄いですね。それじゃあ、本番、しちゃいましょうか？」
「は、はい！」
備え付けのベッドの上で、プリンと持ち上げられたお尻を鷲掴みにし、俺は濡れそぼった彼女のそこに、いきり立つ俺のモノをあてがった。

ぱっ
ぱっ
ぱっ
ぱっ
「くぅ、彩花さんのおまんこ、相変わらずキツキツで……！」
「ああん♥」
ダメだ。名器すぎて自然に腰が動いてしまう。

パン
パン
パン
パン
「うおおおぉぉ……！」
「もう、そんなに激しくしたら壊れちゃいますよぉ♥いつもいってるように、女の子にはもっと優しくしないといけませんよ♥」

ぴ
ぴ
ぴ
ぴ
ぴ
「すみません、でも無理です！
彩花さんの中、気持ち良すぎて
止められません！」
「あらあら、仕方がないですね。
……んン、ふぁ、私もイッちゃい
そうです♥」

「イク！　イクイクう！」
腰を密着させた途端、俺は
三度目の射精をむかえた。
彩花さんの中で放出したそれは、
これまでで一番気持ちのよい
ものだった。

ドクドク
あっ
「あっ、はあぁぁ……ん♥
おまんこに熱いのがドクドクって入ってきています♥」
「うっ、あっ、ああ……」
彼女の中は、まるで別の生き物のように、精子を搾り取ろうと蠢いては締め付けてくる。

ズズ
「んン……、子宮に精子を出されてイッちゃいました♥気持ちよくしてくれて、ありがとうございます♥」
女神や。ここに女神様がおるで。
そんな女神様の中から俺は、出し尽くし硬度を失ったそれを引き抜いた。

ビクッ
「あン、抜いちゃったんですね」
子宮の奥に出したためか、すぐに
精子は出てこない。
だが、次の瞬間――

『んん……あっ』
ゴプッと精子の塊が溢れ出る。
おおっ、我ながら凄い量だ。

ガ…
『ふふっ、三回目とは思えないほど出ましたね……って、あれ？また大きくなっちゃいました？』
どうもその光景を見て興奮したのか、彼女の言葉通り、俺の股間は再び硬さを取り戻していた。

一方その頃学生寮では――
「へへー、お姉ちゃんがいない間、亜樹にたーっぷり奈々の匂いをマーキングしてあげるんだから♥」
「んぶっ！」
「ほら、亜樹ペロペロしてぇ♥」
ぱンツ♥
んっ

「あっ、はぁン、亜樹ってば上手♥もしかしてお姉ちゃんに仕込まれちゃった？」
「んっ、ちゅぶ、ぢゅるるる……」
「あっ、あっ、あっ、イク！亜樹にペロペロされてイッちゃうぅぅ……♥」
ふぁ♥
ぴちゃ
くちゅ

「はぁ、はぁ……♥
亜樹のおちんちん、また大きくなっちゃったね。
奈々がまた気持ちよーくしてあ・げ・る♥」
「ふぐぅ……」

「ちょ、奈々さーん、こんな格好恥ずかしいですよぉ！」
「ふっ、ふっ、ふっ。拒否権はない。亜樹は大人しくヤられればいいのだ！」
「うう……」

あん♥
「んっ、ふっ、あはぁ……っ♥
これ、亜樹のこと犯してるって感じがして、ちょー気持ちいいかも♥」
「うっ、ふぁああ……！」
ずちゅ♥
ずちゅ
ぱんぱん♥
ずちゅ

あっ
「なっ、奈々さん、出ちゃう！
出ちゃうからぁ……っ！」
「んっ、はあぁぁ……んん♥
いいよ、このまま奈々の奥にぴゅっぴゅっしてぇ♥
いっぱい出してぇ♥」
「そんな、ダメです！
赤ちゃんできちゃいますよぉ！」
ぱちゅ♥
ぱちゅ
ぱちゅ
ぱちゅ♥

ハァ
ハァ
ハァ
「あっ、あっ、あっ、はぁあああ―あ―」
「んンン、出てるぅぅ……♥
亜樹の精子がビュルビュルって奈々の
膣内に出てるよぉ♥」
ドク
ドク

「あはっ、いっぱい出てくる。ちょーウケるんですけど―」
「も、もう！　赤ちゃんできても知らないんですからね！」
「ええー、責任、とってくれないの？」
ゴッ ゴッ
「うう……」
「ふふっ、大丈夫だって。今日安全日だし♥」

「……そういえばさ、亜樹はお姉ちゃんの昼の仕事とか知ってんの？」

「昼？　僕たちが学校にいっている間、管理人さんって他に何か仕事しているんですか？」

「ああ、うん。学生寮ってあんまり儲からなくってさ。まあ、お姉ちゃんが何もいってないのなら、気にしなくていいと思うんだけど」

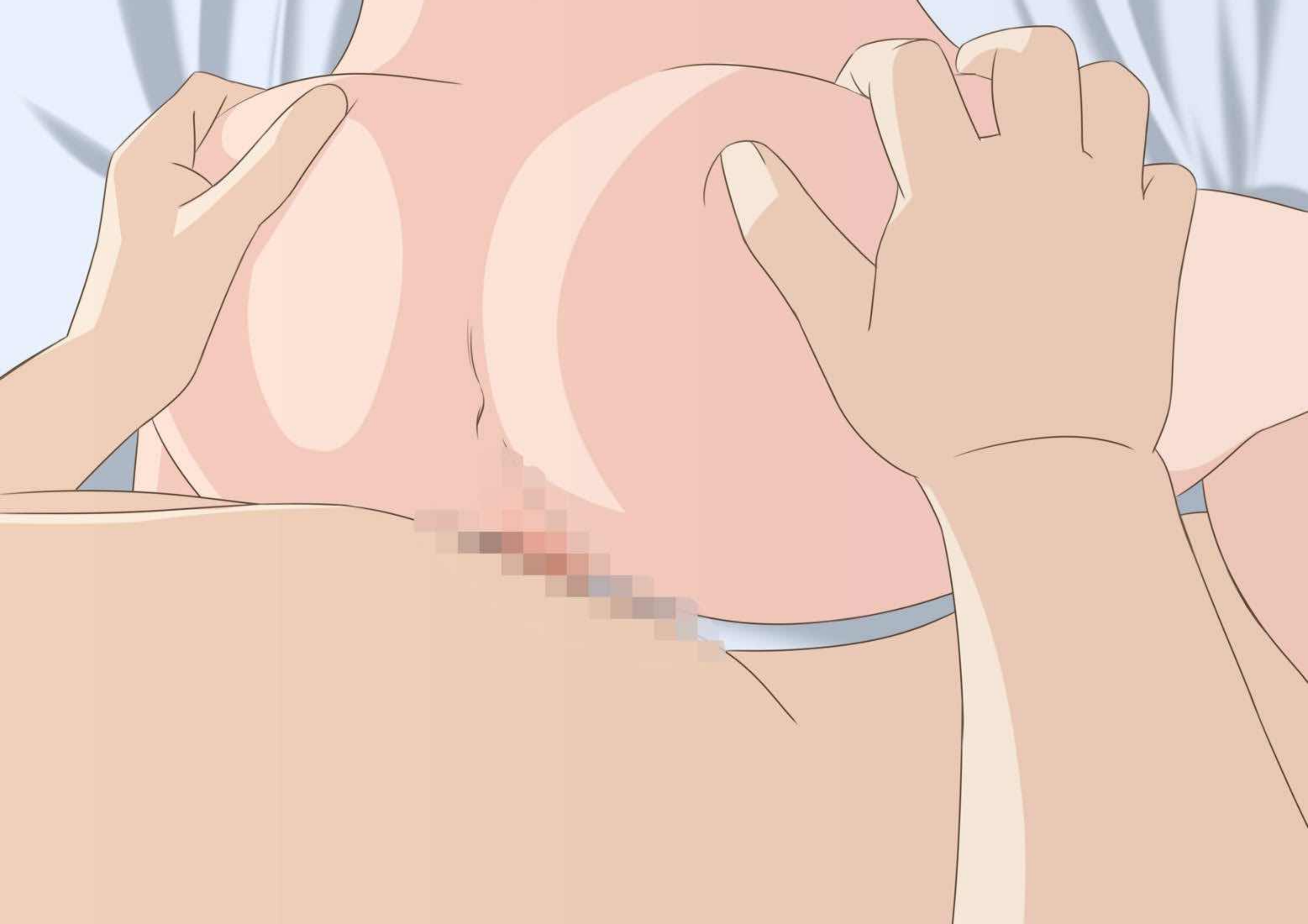
「すっかり髪解けちゃいました」
これで何回目だろうか。時間も残りあと僅かとなり、
今度は彩花さんが上になってくれる。
「ふふっ、頑張って動きますからね。
いーっぱい、おまんこにぴゅっぴゅしてください♥」

『ふっ、あはぁ、んん……♥
子宮におちんちん届いちゃってます♥
大人おちんちん、凄いです♥』
「くぅ、彩花さん、彩花さぁん！」
気持ち良すぎて、頭が真っ白になる。
んっ
あはぁ
はぁ…
ぢゅぷ
ぢゅ

「あっ、凄い♥
私ももうイッちゃいそうです♥」
「はぁ、はぁ、彩花さん！　一緒に、一緒にい！」
「あン、出して、子宮に赤ちゃんの素、いっぱい
ぴゅっぴゅしてえ♥」
「うう……っ！」
あっ
あん
ズズ
ズズ

「くはぁ、あっ、ああ……」
出し切った。もう一滴も出ない。空っぽだ。
「ふふっ、子宮にいっぱい出てるのわかりますよ。こんなに出されたら、お薬飲んでても赤ちゃんできちゃいそうですね♥」
ハァ
ハァ
ハァ
どくん
どくん

ふ～ん
「んー♥」
未だ繋がったまま、唇を合わせる。
俺、もうこのまま死んでもいいかも。
レギュ

「ふぅ……、ご満足いただけましたか？」
「最高でした。お金ができたらまたすぐにでも来ます！」

「はーい、お待ちしてます♥
でも無理はなさらないでくださいね」
明日からまた仕事を頑張ろう。
彼女の笑顔を見るだけで、そう思えるのだった。